恩納村誌編さん室だより46

ブラジル移民～青年隊移民について～

今回はブラジル移民の中の「青年隊移民」についてご紹介したいと思います。

青年隊移民は戦後の青年会活動と結び付いた移民です。戦後、沖縄が荒廃とする中、地域を再建しようと各地域で青年たちの活動が活発となりました。一九四六年六月ごろまでには各字や区で青年会が結成されて行きました。一九四七年七月頃には各市町村の青年会も結成されました。こうした青年会活動は「村おこし運動」を展開し、郷土の復興を目指していました。

そんな中、沖縄青年連合会は日本青年団協議会の活動に参加し、産業開発青年運動の実情を視察しました。そしてこれに感銘を受け、一九五三年には日本青年団協議会へ加盟、一九五四年の総会では沖縄青年連合会でも産業開発青年運動を導入することを決議しました。早速この年の十一月、産業開発青年隊のさきがけとなる隊員養成を目的として、第一次本土派遣青年隊が十名、本土へ派遣されました。この中には恩納村の新里全功（後の村議会議員）もいました。そして翌年の一九五五年、沖縄産業開発青年隊が設置されました。

沖縄産業開発青年隊は、将来、海外移民を希望する青年、あるいは郷土の中堅として活躍しようとする青年たちに、毎日一定の講義を行い、農業技術や機械、その他の技術を習得させ、自主的な共同生活を通して、良識ある協調の精神と、たくましい開拓精神を養成することを目的としていました。

恩納村からも一九六〇年代までには三十四名（本土派遣青年隊と女子青年隊を含む）がこの青年隊を修了しています。

一九五六年、日本本土の産業開発青年隊のブラジル移民計画のため、ブラジル各地の実情調査が行われました。これについて、一九五六年七月七日の琉球新報ではブラジル調査を行っていた建設省総合開発計画局長が読売新聞社あてに報告した「開発青年隊は、第一陣十七名のブラジル到着とともに、早くもひっぱりだこ、また、サンパウロの沖縄海外協会では沖縄からも青年をよびよせる運動をはじめた」という内容を伝えています。さらに同紙は七月三十一日には「在伯沖縄協会長花城清安氏から『政府の青年開発移民をあらゆる困難を排して全面的に受け入れることを決定した』と回答があったことを報じました。

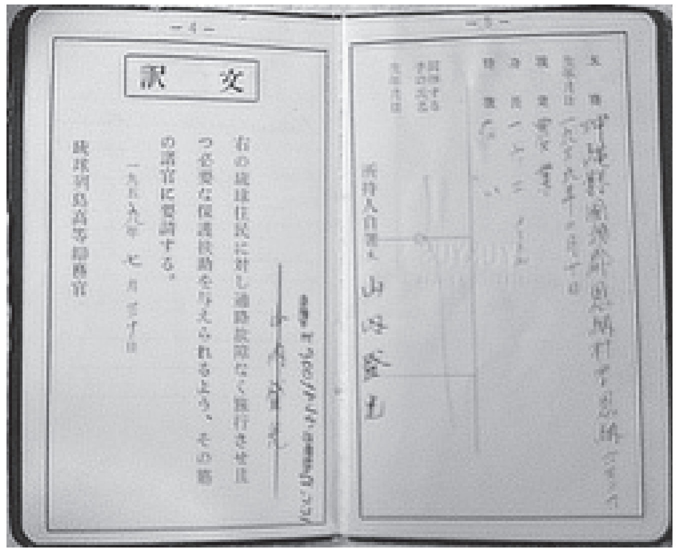
恩納村からの青年隊移民名簿

氏　名	渡航年	隊　次
大　城　保　宣	1957年	第3次青年隊移民
安富祖　秀　吉	1959年	第6次青年隊移民
山　内　盛　光	1959年	第6次青年隊移民
津嘉山　朝　夫	1959年	第6次青年隊移民
金　城　永次郎	1960年	第8次青年隊移民
伊　波　興　喜	1962年	第11次青年隊移民
佐久本　嗣　文	1962年	第11次青年隊移民

青年隊移民でブラジルへ渡った
安富祖秀吉さん（左）と山内盛光さん（右）

恩納村からも先の三十四名の内七名が青年隊移民を目指して産業開発青年隊に参加しています。

村出身の山内盛光さんは『移民青年隊着伯二十五周年記念誌』の中で、「当時まだ就職難の時代は続いており、学校を終えても特別な手づるか、成績優秀でない限り将来の見通しは暗かった。そのような時、毎日のようにボリビア向け出発する家族移民のニュースがよく新聞紙上を飾り、それに歩調を合わせた移民青年隊は当時の若者にとって充分に魅力ある存在であった。」と述べています。



山内盛光さんのパスポート　1959年7月30日付

恩納村からブラジル移民計画のためにこの青年隊に参加したのは、大城保宣（第四回修了者）さん、安富祖秀吉（第九回修了者）さん、山内盛光（第八回修了者）さん、津嘉山朝夫（第十回修了者）さん、金城永次郎（第十五回修了者）さん、伊波興喜（第十七回修了者）さん、佐久本嗣文（第二二回修了者）さんでした。二〇一三年度に村誌編さん室で実施した調査では安富祖秀吉さんと山内盛光さんにお話を伺うことができました。（幸喜）

【参考文献】

〇『移民青年隊着伯25周年　記念誌』在伯沖縄青年協会　1982年

〇『創立三十五周年記念誌　青年隊のあゆみ』三十五周年記念誌編集委員会　社団法人沖縄産業開発青年協会　1990年

〇『ブラジル沖縄県人移民史　笠戸丸から90年』ブラジル沖縄県人会　2000年

〇『創立50周年記念誌　青年隊の50年』50周年記念誌編集委員会編　財団法人沖縄産業開発青年協会　2006年

〇琉球新報「沖縄青年隊を招く」　1956年7月7日

〇琉球新報「全面的に受け入れ決定」　1956年7月31日

沖縄の移民青年隊

カンポ・グランデ　山内 盛光

沖縄県の北部、東村平良山に産業開発青年隊訓練所の施設がある。

そこを終了すると種々の免許証を取得出来るので、良い就職口にもつかがり、若者達にとって大きな魅力となっている。そて毎年百名程の隊員が訓練に耐え抜いて県内各地で力強く活躍している。

私がそこを訪ねたのは、まだ瑞慶覧理事長健在の頃で訓練所は計画に従って整備中にあった（ブルトーザーで山を切りくずして谷を埋め畑地を造成）。

その時私は理事長の案内で、隊員になにか言わねばならない羽目になり、冷や汗ながら「私達の場合は、移民を目指してダム工事に通い、スコップで用水路の穴掘りや盛り土作業で体を鍛えました。今、時代は変り、皆さんはこのようなすばらしい施設で、明日の沖縄の担い手として訓練を受けているのだと思います。健闘を祈ります」と挨拶したものである。

事実、青年隊訓練所は、戦後の荒廃と混乱した社会情勢の中で村おこしと青年の自立対策として誕生したのであった。

綱領にも友愛と共励、自主、自立の精神が謳われており、私達は労働作業で得たわずかな報酬で自活しながら、夜は必要な講義を受け海外雄飛に備えたのであった。

ふり返って見ると、沖縄は去る大戦で米軍に、島全体が変形する程の砲弾を打ち込まれすべてを失った。その上敗戦で海外より引き揚げ者が殺到して人口問題は深刻を極めた。さらに食糧不足、就職難が追い打ちをかけた。

一方、私達は学齢期に達し、小学生になったものゝ青空教室と教科書不足の状態が何年か続いた。しばらくして米軍払い下げのコンセット校舎が建てられたけれど、それは実にひどい代物であった。

夏場はムシブロのように暑く、冬になると寒さで手もこごえ、雨天には雨漏りとトタンを打つ雨音に悩まされた。

このように貧困と米軍占領下と言う特殊事情に不満を抱いた者が海外に眼を向け、移民を志すのは当然の成り行きであったと思う。

そこで移民の資格を得る為には開発青年隊で訓練を受ける必要があった。そしてこの道は呼び寄せ人のいない独身者にとって大変都合良かった。この方法でグループを編成し送り出されたのが私達移民青年隊である。その入伯状況を見ると、一九五七年の第一次より六四年までに三百名が渡伯した。

しかし、四十数年を経た現在その数は、色々な事情で帰国した者、隣国へ再移住、音信不通、そして不幸にして死亡した人達を除くと二百名程に減っている。

ところで、ブラジルを第二の故郷と定め、奮闘した同士諸賢は、ゼロからの出発にもかかわらず現在、殆どが立派な基盤を築き又己の果たせなかった最高学府への道を子息に歩ませている。

これはすばらしい出来事と言える。そして青年隊と言う背番号は遠からず死語と化するであろう。が、その精神はきっと子弟に受け継がれ長生きしてほしい………。と願う者である。

「ニッケイ新聞（2003年11月27日）」